

戦時下に描かれた絵画（２） - 「弾痕光華門外」 -

画家たちの描いた激戦のモチーフを知る

Tokyo Conservation 株式会社ディヴォート・絵画保存修復事業部
協力 / 住友資料美術館

はじめに

第二次世界大戦時には、多くの記者や作家が従軍し、記録や戦争絵画が残されている。現在それらに触れる機会も未だ多くはない。このたびは、先の長谷川春子作「少婦国防」に続き、住友資料館に収蔵されている、いわゆる「戦争絵画」の中から数点を選抜しての発表となる。

「光華門」は中国南京に存在した城壁である。昭和12年12月10日、いわゆる日中戦争（支那事変）のさなか、日本軍は中国、南京に総攻撃を開始。その冬、中国の城門である光華門、中華門、中山門を攻撃した歴史がある。多くの犠牲を伴った史実のなかで幾多の画家や作家も従軍した、まさに日中戦の激戦の記録を残す領域だ。今回発表する「弾痕光華門外」Fig.1は、作者不詳の油画だ。光華門は中国南京に存在した城壁であり、南京攻略戦の際に、攻撃の舞台となった中国の城壁の一つである光華門の陥落直後の風景を描いたものである。そこには門内の隧道を歩く中国人、また日の丸を持つ人も描かれている。日中戦争の舞台となった光華門は、他の作家によっても記録、表現されており、隧道内の銃弾痕を描写した当該作品は、残された資料とともに当地の風景を残す貴重な視覚的記録といえるだろう。

本研究では、当該作品の調査～修復をはじめ、描かれた風景に関する考察をおこなった。本論では、画面に表現され、モチーフとなった光華門の姿をたどり、当時、画家として従軍した猪熊弦一郎、佐藤敬をはじめとする作家たちも描いた同様の光華門を題材とした作品も紹介し参考とした。加えて同資料館より新たに確認された作品で、戦時下当地の城壁門を描いた作品も表し、激戦地をモチーフとした近代戦争史に関わる貴重な未発表作品を公開する機会とさせて頂いた。

1. 日本軍による南京への攻略と「光華門」

日中戦争（支那事変）における戦闘の1つに、南京攻略戦があり、昭和12年12月10日、南京総攻撃が開始され、南京城攻略戦では、周囲50キロの城壁を取り囲んだ日本軍には、第三師団、第六師団、第九師団、第十三師団、第十六師団、第百十四師団からなる戦闘部隊であった。同月12日に総攻撃が開始され、13日には南京城は完全に占領された。同月9日に光華門に到着した第九師団は光華門より攻撃を開始し同門を陥落した。

2. 南京と従軍画家

1937年、昭和12年の日中戦争勃発後には、翌年の4月には「支那事変海軍従軍画家スケッチ展」が開催された。その後、6月には陸軍省が大日本陸軍従軍画家協会を結成し、陸海軍省は戦地へ従軍画家を派遣する方針を決定。現地の戦闘部隊とともに行動を共にする従軍画家のなかには、小磯良平、藤田嗣治、宮本三郎、中村研一、山田新一、鶴田吾郎ら多くの画家が名を連ねた。その年の夏には「支那事変勃発一周年記念陸軍従軍画家スケッチ展」が開催された。その他、大陸の南京には、猪熊弦一郎、佐藤敬、中川紀元 上海・南京戦に参加しているが清水登之は、上海、南京、武漢、北ボルネオ、マレーに赴くなど、計8回派遣されている。猪熊弦一郎、佐藤敬は、やはり光華門の陥落後の写真 Fig.9 に観られる位置から描いている Fig.10~11。「弾痕光華門外」では、やや隧道に踏み込んだ位置から隧道の内部の壁面を中心に描いている Fig.3。住友資料館において確認された、中国大陆に赴いた従軍画家による作品と観られる作品は、今回の光華門を描いた作品だけではなく、雪の風景のなかに日本軍の兵士が城門に向かって行進する姿を描いた作品がある Fig.12。日中戦争は初冬に起こったことから、この雪景色は、当地の様子を目の当たりに記録している。さらにこの作品と、光華門の周囲の情景模式図 Fig.6 を観ると、この作品もまた、隣接する小川を越えて光華門に向う日本軍の様子を描いているように観ることもできる。

3. 「弾痕光華門外」作品の組成調査 / 状態と修復

作品寸法が、90.7×72.9cm。この作品の画面右下方には、国四郎と署名があるが、その傍らには、他の作者と思われる署名を塗りつぶしたような痕跡が認められる。そしてその脇には「弾痕光華門外」と画題が記されている。国四郎とは満谷国四郎と思われるが、満谷は、1936年、まさに日本軍が、南京を攻略する前年に亡くなっていることから、後年の不届きと言っている署名の書き直しと言わざるを得ない。従軍した画家や、記者は数多く記録に残っているものの、実際に描かれた絵画や記録は限られた物ではないのか。作者不詳となった当該作品も、今では惨状を知る貴重な記録だ。作品は、麻布のキャンバスに油絵具で描かれており、作品を資料館で確認した当初、画面、裏面ともに著しい塵埃に覆われ、画面全体に渡り絵具の固着がやや弱まっている箇所もあり、浮き上がりや細かい剥落が多数みとめられた。作品は別の絵が描かれたキャンバスに描き直されたことが確認されている。使用済みの古いキャンバスであるために、塗り重ねた絵具の積層した層に、固着の問題があると考えられる。赤外線 Fig.5 による観察では、横構図に描いた富士山と思しき風景画の構図が観てとれる。剥落箇所から現れる赤色の下塗りが露出し「赤富士」ともとれる山の形態が確認できる。作品は、洗浄、剥落止め、補彩等の修復処置を施し、やや失っていた色調、色価も回復した。

4. まとめ

今回の発表では住友資料館にて確認された「戦時下に描かれた絵画」の中から、前回の長谷川春子の作品に続き、合計3点を発表することができた。前回の長谷川春子作「少婦国防」は、栃木県美術館の学芸課長、小勝禮子氏の調査により、1943(昭和18年)の陸軍美術展の出品目録に同題の作品が掲載されていることが確認され、作品の来歴が明瞭になり戦時下の女性画家の活動を裏付ける数少ない貴重な作品となった。今回の「弾痕光華門外」では、画面の中に記された署名も塗りつぶされ不詳となっている。塗りつぶした絵具を剥がさない限り不詳な作品だ。画面の右下方にかろうじて「弾痕光華門外」と記された事で、歴史的な背景を知ることができた。当該作品のみならず、多くの作家たちによって描き残された激戦の記録は、制作者不明という、現状においては未確認な資料であっても、修復保存することで物を残し、戦争史の細やかな部分を伝え

る素材として活かす事ができる。同資料館では、そのような不詳な資料作品を数多く保管している。

それらは「少婦国防」同様、時代の生き証人として発掘される可能性があるだろう。

時の経過とともに当時の資料を追いかけてゆくことも容易ではなくなる。今回も、光華門周辺の写真資料を得ることに困難を極めた。都内にある東京大空襲・戦災資料センターでも現在、写真資料を得る事は難しいという。同資料センターにおいては、限られた写真とともに、遺族や関係者による多くの戦災の風景が描かれた作品が展示されている。写真、証言、映像とともに、これらの絵画も貴重な資料になっている。戦時下の絵画記録は戦争史における文化財であり、当該研究作品のような不詳として保管されていた視覚的な財産を、いかにして保存していけるかが、歴史の記録を次世代へ伝えるための提言といえるだろう。



← Fig.1 住友資料館所藏「彈痕光華門外」 / 修復後全圖
↓ Fig.2 修復後裏面





Fig.3 画面右方近接写真 / 弾痕の描写



Fig.4 画面中央近接



Fig.5 画面右中央 / 赤外線写真

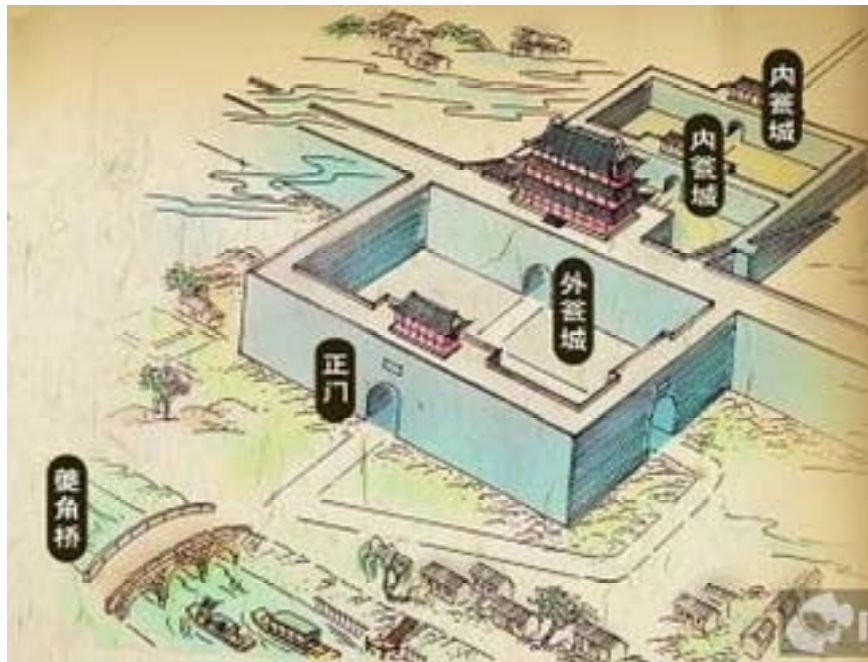


Fig.6 「光華門」城壁を中心とする城壁の構造



Fig.7 光華門の城壁を遠景より望む



Fig.8 光華門 / 昭和 13 (1938) 日本軍 (写真) 記録班撮影



Fig.9 猪熊弦一郎や佐藤敬の描いた場所から門を望む (1938~39)



1889 年当時の光華門



Fig.10 猪熊弦一郎「南京光華門（中支戦跡画集より）」紙／水彩 1942年 Fig.11 佐藤敬「南京光華門」キャンバス／油彩 1941年
（Fig.10～11 豊田市美術館「近代の東アジアイメージ 日本近代美術はどうアジアを描いて来たか」展覧会図録より転載）



Fig.12 住友資料館所蔵作品 「戦争絵画」より



Fig.13 陥落後の城内、光華門下において、戦況の報告を受ける、陸軍大将東久邇宮 稔彦王（*隧道内の弾痕を観ることが出来る）



Fig.14 光華門の傍で戦死した日本の兵士の家族が供養する姿（年代不詳）

参考文献：

- * 株式会社近代出版社,「靖国神社遊就館図録」2008, 靖国神社, 東京
- * 岩波書店,「イメージの中の戦争日清日露から冷戦まで」1996, 丹尾安典・河田明久, 東京 * 豊田市美術館,
- * 岩波書店,「近代の東アジアイメージ -日本近代美術はどうアジアを描いて来たか」2009, 天野一夫・稲賀繁美・藤村里美, 豊田市
- * 三益社, 皇威輝く「中支之展望」上海・南京・蘇州・杭州, 1938, 西村益者 ,和歌山